



第五回本公演



淡座

江戸にまなび、
音と言葉のあわいをえがく

淡座は、現代音楽、クラシック音楽、日本の芸術文化を行き来し、文化の古今と東西をつなぐことを目的とした、クリエイティブなグループです。

私たちは、様々な日本の文化のなかでもとりわけ、江戸文化から学ぼうとしています。江戸文化独自の発想のもと、「形のないもの、目に見えないもの」、つまり、言葉、文化、哲学、思想など、ひとの生活を豊かにするものの在り方を模索し、作品や演奏として発信しています。

曲目

- 一、端唄「夕暮れ」(桑原ゆう編曲)
三味線弾き唄い・ヴァイオリン・チェロ
- 一、端唄「木遣りくづし」(桑原ゆう編曲) **編曲初演**
三味線弾き唄い・ヴァイオリン・チェロ
- 一、端唄「冬の寒さ」
三味線弾き唄い
- 一、端唄「冬の寒さ(梅は咲いたか)」
三味線弾き唄い
- 一、利きバツハ―無伴奏曲聴きくらべ
チェロ、三味線、ヴァイオリンによる各独奏
- 一、桑原ゆう／はすのうてな
三味線・チェロ・ヴァイオリン

―休憩―

- 一、桑原ゆう／ソナタ・ヴォカリーズ
チェロ独奏
- 一、桑原ゆう／唄と陀羅尼 **日本初演**
ヴァイオリン独奏
- 一、J.S.バツハ／カンタータ第147番
「心と口と行いと生活が」より
(桑原ゆう編曲) **編曲初演**
ヴァイオリン・チェロ・三味線
- 一、桑原ゆう／夢の浮橋Ⅱ―端唄「夜の雨」より
三味線弾き唄い・ヴァイオリン・チェロ



二〇二三年 事始め

2023年2月19日 ㊤
会場未定

事始めとは、物事に初めて手をつけること、手始めという意味です。旧暦では、お正月に神様を迎えるための一連の行事が終わり、春を迎え、人の日常生活や農作業の始まる2月8日を「事始め」といったそうです。音と唄に酔う楽しいひとときをお届けします。会場や内容等の詳細は、またご案内してまいります。

お問い合わせ▶ info@awaiza.com・080-4091-6491

第五回本公演 バツハと端唄

日時 2022年12月4日 ㊤
15:30 開場
16:00 開演

会場 安養院 瑠璃光堂
淡座メンバー 三瀬俊吾(ヴァイオリン)
竹本聖子(チェロ)

本條秀慈郎(三味線・唄)
桑原ゆう(作曲・編曲)

宣伝美術/桑原ゆう
主催/一般社団法人淡座
共催/安養院

かたやヨーロツパ、かたや江戸。

バッハは、一六八五年に生まれ、一七五〇年に亡くなりました。暴れん坊將軍・徳川吉宗は、一八四年に生まれ、一七五一年に亡くなったので、ふたりは生死をほとんど同じくしています。

端唄、バッハの音楽、そして桑原作品。「ことば」と「折り」をテーマに、同時代に生まれた東西の音楽のあわいをさぐる試み。

曲目解説

一、端唄「夕暮」(桑原ゆう 編曲)

夕暮に眺め見あかぬ隅田川 月に風情を待乳山
帆上げた船が見ゆるぞえ

アレ鳥が鳴く鳥の名も都に名所があるわいな

ヴァイオリン、チェロから「声」が聴こえる淡座ならではの表現をお楽しみください。

一、端唄「木遣りくづし」(桑原ゆう 編曲)

格子造りに ご神燈下げて 兄貴や家かと 姉御に問えば

兄貴や二階で木遣りの稽古 音頭取るのは アリヤ うちの人

エンヤラネ サノヨイサ エンヤラネ

エンヤラヤレコノセ サノセ

アレワサ エンヤラネ

「木遣り唄」とは、複数人で材木を運ぶときに掛け声や合図として唄われた作業唄ですが、いま現在では民謡や祭礼の唄として、各地に伝承されています。「くづし」とは、調子を変えて陽気に演奏することです。

一、端唄「冬の寒さ」「冬の寒さ(梅は咲いたか)」

冬の寒さに 主を囲いの

ひとつの歌詞をちがう旋律で、冬から初春へと唄い継ぎます。

一、利きバッハ―無伴奏曲聴きくらべ

無伴奏チェロ組曲第三番ハ長調 BWV1009 前奏曲

無伴奏チェロ組曲第二番ニ短調 BWV1008 サラバンド

無伴奏ヴァイオリンソナタ第三番ハ長調 BWV1005

第四楽章アレグロ・アツサイ

各楽器によるバッハの妙味をお楽しみください。

一、桑原ゆう／はすのうてな

旗揚げ公演「嘶×現代音楽」(二〇一一年)の際、古今亭志ん輔師匠の落語をとまなう作品《反魂香》の片割れとして、その世界観を音楽だけで表現しようと試みた作品。よく耳を澄ませないと聴こえない、三味線の開放弦から指をはなすときのごく小さな音に、少しずつ色をつけていくかのように、ヴァイオリンとチェロによる音の層が重なっていきます。「はすのうてな」という語は、古今亭志ん朝師匠の「反魂香」を聴いてはじめて知り、その意味、音の響き、イメージのすべてが美しく感じられて、タイトルとしました。

第二回本公演(二〇一八年)での再演に際し、大幅に改訂を施しましたが、改訂時の私と、その七年前の私とは、ほとんどちがう人間で、作曲した当初の意図を殺さず、形だけを整えてあげるように改訂するのは、いつもながら、なかなかむずかしいことでした。

一、桑原ゆう／ソナタ・ヴォカリーズ

バッハのヴァイオリンとチェロのための無伴奏曲を全曲演奏する、全六回の連続企画「バッハの場」(二〇二一年)において、私も、無伴奏ヴァイオリン、無伴奏チェロのために「ソナタ」を書くことになった。《ソナタ・ヴォカリーズ》は、「バッハの場第五回」で初演した作品。

「ソナタ」は、時代によりうつろってきた。いま現在、古典派以降に主流となった独奏ソナタを想起することが多いが、もともとは「鳴り響く」という意味の *sonare* に由来する語で、単に「演奏されるもの」というくらの意味であった。クラシック音楽の歴史の大筋をつくってきたともいえる「ソナタ」にどう向き合うか、試されているのを感じながら、「楽器を鳴らす」ことに立ち返って作曲した。

一、桑原ゆう／唄と陀羅尼

ヴァイオリン奏者のイリヤ・グリーンゴルツ氏と、指揮者のイラン・ヴォルコフ氏が新しく立ち上げた、I&I Foundation (チュリヒ) の委嘱により、二〇二〇年から二〇二二年にかけて作曲した作品。I&I Foundation は、演奏家と作曲家を結びつけ、全額出資による委嘱を行うことを目的としている。その最初のプロジェクトで、世界中の若手作曲家から、注目すべき五人として、イギリス、ロシア、イスラエル、アメリカの作曲家、そして、日本の私を選ばれた。

十数年たずさわってきた、仏教音楽である「聲明」。それからまなんで得た音像や音感を、写しとることを越えた形で、音楽としてどう形にできるか。ずっと考えてきたこの問いに、やっと最初の答えが出せたと感じられた。タイトルどおり、「唄」と「陀羅尼」により構成している。「唄」とは、位の高い老僧により独唱される聲明の曲種のひとつ。唄は「唱える」のではなく「引く」といわれ、各字を装飾的旋律で長く引延ばして唱える。「陀羅尼」は、サンスクリット語で唱えられる、強い力をもつ呪文。真言ともいわれ、真言としての陀羅尼は密教で特に重要視される。

コロナ禍におけるイリヤ・グリーンゴルツ氏のオンライン初演以降、彼と、イタリアのヴァイオリニスト、マルコ・フシ氏により、ヨーロッパやアメリカで何度も演奏されているが、本日が日本初演となる。

一、J. S. バッハ／カンタータ第147番

『心と口と行いと生活が』より (桑原ゆう 編曲)

第五曲アリア「備えよ、イエスよ、今もなおあなたの道すじを」

第七曲アリア「助けて、イエスよ、助けてください」

第十曲コラール「イエスは変わらざる私の喜び」

カンタータ第147番は全十曲からなり、終曲のコラールは「主よ、人の望みの喜びよ」の別名で、広く親しまれています。作品の成立にあたっては二つの段階を踏んだといわれます。一七一六年にワイマールで書かれた原曲 BWV147a は、クリスマスを間近に控える、待降節第四主日のための作品でした。その後、バッハが移り住んだライプツィヒでは、待降節第四主日のカンタータを演奏せず、静かにクリスマス待つ習慣があったので、マリアの訪問の祝日用に仕立て変え、BWV147として完成しました。

カンタータ全体の表題は、「心と口と行いと生活が、キリストこそ神であり、救い主である」との証をしなくてはならない」と、にぎやかに合唱する第一曲の歌詞に基づきます。「心と口と行い」から、キリスト教と対峙する仏教の用語「三密」、つまり「身密、口密、意密」を連想させられ、興味深く感じます。

一、桑原ゆう／夢の浮橋 II ―端唄「夜の雨」より

『夢の浮橋』は、端唄を「編曲する」というより、より創作的に「リコンポーズする」シリーズと位置付けている。端唄の島とアンサンブルの島がそれぞれ独立して存在し、その間に橋をかけるように、つまり、ふたつの材料を調理して一品つくるというよりは、素材の特徴はそのままに残し、並べ方や組み合わせ方で新しく見せるようなつくり方を試みている。

文／桑原ゆう